岡山市長賞（中学校・最優秀賞）

新聞感想文の部

親子って友達？

岡山市・岡山大付属中２年　竹林　古都

山陽新聞の特集ページで、「子育てキャラバン隊」という「親子関係」をテーマに専門家三人が、それぞれの分野から「子どもとどう向き合うか」「親のあり方」などのテーマで、親子関係について意見交換していた。

その中で私が特に気になったのは、「友達親子」についてだった。記事の中でも、「友達親子」は未熟な親子関係や子供の親離れの遅れを表すものという否定的な印象で語られていた。

私もたまに、母親と娘が姉妹のような格好をして仲良く「友達親子」を自慢っぽくアピールしている様子をテレビのワイドショーや雑誌などで見ることがあるが、はっきり言って「キモい」。もし私の母が、私と同じようなショートパンツにニーハイソックスというような格好でガールズトークをしていたら、鳥肌ものだと思う。いくらがんばっても顔は完全なオバさんだし、若くないのに若者に合わせようとした会話は聞き苦しいだけだと思う。まして、意識の面までも、友達と同じ感覚の母親だったらどうだろうか。自分と同じ程度の意見では大したアドバイスにはならないし、私達が大人になることを邪魔している気がする。

親の意見は「ウザい」時もあるが、私達中学生より多くの経験や失敗を積んで、きっと色々な立場や方向から物事を考えたり判断したりできると思う。そういう「大人」の方が絶対に参考になると思う。そんな風に考えると、私には「友達親子」は決して良い親子関係とは言えないと思える。

そこで、私自身の母親のことを改めて思い返してみた。母は、私が中学校に上がるころから、学生時代の経験談や失敗談を折にふれて話してくれるようになった。そして、その失敗談の終わりには必ず、

「ママって、バカじゃろう。」

と言い、友達との思い出話の最後には、

「○○さんは、あの時きっと△△と思っていたんだろうなぁ。」

などと言って、話を締めくくる。

母のこういった思い出話は、私が失敗したり友達とトラブルになったりした時、とても参考になる。全てが当てはまるわけではないが、貴重な予備知識となって役立っている。そう思うと、親と友達は私にとって全くちがう役割を果たす存在であり、私と母は、むろん「友達親子」ではないと思った。そして、そのことを嬉しく思った。

では、私にとって親とは、どんな役割を果たす存在なのだろうか。前述のように、母は私にとって良きアドバイザーや相談相手だけでなく、学習の頑張りを認めてくれたり、家事全般の様々な面から私という娘を支えてくれたりしてくれる。特に、幼児のころは食事をはじめ、日常生活全ての面で、母がいないと生きてはいけないと思えるほど頼りにしていた存在だった。母がいなければ、さみしくて悲しくて、精神面でも欠かせない存在だった。それは、中学生になった今でもあまり変わらないと思う。日頃は意識していないと、幼い頃は母だけで、支えてもらっていることに何も変わりない。

また父に関していうと、幼い頃は母さえいれば父がいなくても平気だった。むしろ父と二人きりになると心細く感じるくらいだったが、今は少し違う気がする。父は無関心かと思えるほど冷静であり、やたら驚いたり喜んだりするという感情がない代わりに、安定感と安心感に満ちている。今では、行き慣れない場所に母と二人で行くのは不安で仕方ないが、父さえいれば安心できるほど頼りにしている。そして何より、経済的な面で父が支えてくれていると思うと、父の存在はとても大きく感じる。私にとって両親は、私を支えてくれる存在だと分かった。

新聞の中では、「両親が分担して役割を担えることが理想的だ」と述べられていた。確かに私の家でも、細々とした世話や精神的な部分は母が支え、トータルした全体を父が支えるという役割分担がなされている。そして、それぞれの役割分担のおかげで私の生活が成り立っていると思うと、私はとても恵まれていて幸せだと思う。この記事によって、両親の存在について考えることができて本当に良かったと思う。そして、改めて両親に心より感謝したいと思う。

私の幸せを支えてくれてありがとう。私もいつかは、父や母を支える娘になりたいと思います。

2011年9月22日付　山陽新聞

寸　評

子育てがテーマの特集記事を読み、親子関係に焦点を当てた。「友達親子」に疑問を感じながら親と子の距離感に思いを巡らせ、自分が考える父母の役割、家庭像を、自分の言葉で具体的に述べている。